

ハロー・バービーは電機羊の夢を見るのか？ ～人工知能に望まれること～

やぎ たかゆき
矢木 孝幸

●電機連合・書記次長（総合企画総務部門 兼 総合研究企画室長）

1. はじめに

愚息（現在、小学校6年生）が1年ほど前に「お年玉でドローンを購入したい」との要望に、その時に販売されている複数機種から、お年玉で買えるような初心者モデルを購入しました。まだまだ現在のようにドローンが不適切に使われる前のことですが、ホバリング中に写真を撮影してパソコンに取り込んで楽しむなど、親の世代では考えられないような高度な遊びに、ちょっと驚きました。

考えてみれば、世代によって遊び道具が進化するの当たり前で、ファミコンなどなかった時代の小職の子供時代には、自転車や野球道具さえあれば放課後、友達と一緒に暗くなるまで屋外にいたような記憶が残っています。

2. ハロー・バービーについて

世は変わり、今年のクリスマス商戦の目玉のひとつに、ハロー・バービー（Hello Barbie）が挙げられています。この玩具人形、マテル社（米国）が1959年に発売を開始したバービーに通信機能と学習機能を搭載した「スマート・トイ」と呼ばれるものです。価格は74.99ドル（約9,000円）ですが、報道を読む限りでは、下記のような危険性が指摘されており、あまり大歓迎モードではないようです。

- (1) 子供の創造力が奪われる
- (2) ハッキング・盗聴される可能性がある
- (3) 玩具会社に情報が筒抜けになる

これらの悪評判を聞きながらも、クリスマス・年末商戦で、娘に頼まれて、この「話すバービー」を購入してしまう親も多いかと思いません。

3. 高度なレベルにすでに到達

話をする人工知能で思い出されるのは、先般「イミテーション・ゲーム」という映画が公開され、ドイツ軍のエニグマ暗号を解読するにあたって活躍した数学者のアラン・チューリング氏です。

チューリング氏がいかに天才的であったかを述べるには、この巻頭言では若干誌面が足りないのですが、その提案の一つが、簡単に言えば、電話で会話をして「相手が人間か、人工知能か？」を判定するためのテスト、いわゆるチューリング・テストの提案だと思えます。

この機能、IBMが開発した質問応答システムである「ワトソン」が有名です。同社は、コールセンターでの顧客サービスなどに活用できるとしています。日本郵政（現：生命保険会社のかんぽ生命）は、高齢者向けサービスを共同開発したいと発表、三井住友銀行もコールセンターの支援のため技術検証を行っています。

質問がある程度決まっているなら、人工知能は「適切らしい回答」を引き出すことができる、「ある程度高度なレベル」にすでに到達しています。

4. 望まれる「ニーズの実現」

幼稚園児が自由に絵を描くことから始まって、製品デザインや業務企画の立案など、創造的な作業はまだまだ人間側に残りそうです。

この見地からは、鉄腕アトムやドラえものように、人間の生活を助けるという切り口で、「こんな人工知能があればいいなあ」というニーズをとらえて、人間が人工知能のより一層の技術的革新と利用を図ることが一番望まれるのではないのでしょうか。